

# 草地改良 暖地に向く飼料作物と

九州大学助教授・農学博士  
江 原 薫

## 青刈エンバク（オート）

青刈エンバクは暖地では冬作一年生の飼料作物としては最も広く栽培されている。

この作物は種子の入手も容易であるし、また栽培法も慣れているので暖地の農家は飼料作物として最初に選ぶものである。青刈ムギ類にはこの他、大麦、ライ麦、小麦等があるが、何れもエンバクに勝るものはない。

エンバクはほとんどすべての土壤によく生育し、酸性にも強い。

青刈エンバクの品種に関しては、各府県で多くの試験が行われたが、今のところ次のものがよいと思う。

### 前進（オントード）及びピクトリー

この二品種は北海道の品種で、寒さに弱く晩生である。茎は太く数は少い。葉の幅は極めて広い。これ等の品種は暖地では一

〇一月頃時いて、春先に一度に刈取る

に適し、収量も多い。これ等を厳寒の頃刈取つて二~三回刈を試みると、寒さのひどいときは枯死することがよくある。

日向黒、バージニア・グレイ

これ等の品種は寒さに強く早生。莖は細いが数が多く、葉の幅は比較的狭い。暖地では秋早く蒔いて年内に一回刈取つて、春に二番刈を収穫するには適している。

青刈エンバクの播種期は、二回刈には九

月中旬頃、一回刈のときは一〇~一月頃。

畠幅一~五~三尺の条播。反当播種量は五~一〇升。（一〇~二〇リットル）

コンモン・ベッヂ、赤クロバー或はクリムソン・クロバーなどの間、混作が行われることもある。

肥料としては反当堆肥三〇貫、硫安三

~五貫、過磷酸石灰三~五貫、加里塩三~三貫位施す。特に窒素は大切で一回刈取つた後に再生のために、硫安反当三貫位施す。

この頃は乾草を作つてもよい。近頃は青刈エンバクを、グラス・サイレージに用いることが多くなつた。これは

素を控え目にしなければ、エンバクの生育にコンモン・ベッヂが負けてしまう。

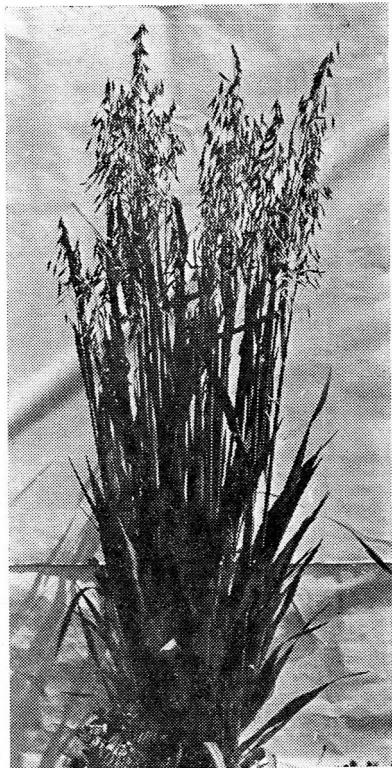
青刈エンバクはわが国では、まだほとんど生草として家畜に与えるので、適当の時に刈取る。しかし最もよい刈取期は出穂期から、子実が牛乳状の汁を出す頃である。

青刈エンバクは暖地で二回刈するときは、一回目を一二月に刈るがよい。寒さが厳くなつてからでは再生がよくない。また一年に三回以上刈取ることも有利でない。一回目の刈取は少くとも地上三寸以上は残るようにする。

放牧に用いてもよい。反当生草収量は六〇〇~一、五〇〇貫位である。



青刈エンバク  
(太 茎)



青刈エンバク  
(細 茎)



され適地は広い。日蔭に強い作物であるから果樹園の下或はまた他の牧草との混播によい。クリムソン・クロバーは連作のきく作物で、少くとも五年位は連作してもよい。

種子は赤クロバーより大きく、一年以上

の古種は発芽率が五割以下になる。

栽培法は大体赤クロバーに準じ、一〇月中頃までに蒔く。反当播種量は脱粒種子で三七四斤、莢のまでは一〇七一五斤。

イタリアン・ライグラス、ベッヂ及び秋蒔ムギ類と混播されることある。

クリムソン・クロバーは開花が極めて早く、春先他のクロバー類に先がけて刈取られる。開花始までに刈取るべきで、刈取がおくれると硬くなり品質が低下する。

反当生草収量は三〇〇一、〇〇〇貫位。

### アルファルファート（ルーサン）

アルファルファーはヒデリに対して極めて強い作物である。九州のような暖地で夏の暑いとき、その上ヒデリが続くときに、所謂北欧型の豆科牧草の中青さを示すものはアルファルファー位である。

アルファルファーの品種は多数あり、暖

地向きのものを九州農試で試験中である。

わが国の暖地では、所謂耐寒性の低い群、例えアラビアン、アフリカン、ペルビアン、インデアン等は成績はよくない。これ等の品種は冬の間でも少し温いときは生長して却つて霜にやられる。またこれ等の品種は生存年限が短い。北海道のような寒地の品種がむしろ暖地でもよいのではなかろうか。

アルファルファーは春先極めて早く青草を生産する。



アルファルファー（ルーサン）



クリムソン・クロバー

アルファルファーは暖地には適しないといふ考え方があつたが、試験の成績によれば暖地でもかなりよいものと思われる。

アルカリ性から中性反応土壤に適する。しかし酸性を矯正すれば多くの土壤に栽培される。堆肥を充分与えれば砂土、火山灰

するがよい。近頃はアルファルファーの根瘤菌は販売されている。

アルファルファーのよい点をあげれば次の通りである。

口 反当の飼料及び蛋白質生産は極めて

乾燥地に適する。

イ 大きい。

ハ 家畜に好まれ、石灰に富むよい飼料。

ニ 永年生であるため種子代及び労力が節約される。

ホ 一番刈が春極めて早く得られる。

アルファルファーの種子は生存年限が長く、発芽は良好である。

肥料は赤クロバーと同様でよい。堆肥は反当四〇〇貫位施したい。硼素の少い土には硼素を施すとよい。酸性土壤には石灰を施して酸性を矯正する必要があることは前に述べた通りである。

播種期は暖地では九七一〇月頃、春は三七四月頃である。春播でもよく生育する。

播種量は反当三七五斤、撒播ではこれの二七三割を増す。

撒播でもよいが、ドリル播（密条播）が普通である。しかしわが国では赤クロバーと同様畦幅一・五尺位に条播することが多い。

アルファルファーは混播は少いが、メド

ウ・フェスク、オーチャード・グラス及びブローム・グラス等と混播することもある。

アルファルファーは移植栽培することもある。

生育のよい根の十分張った苗を深いところからとる。また古株から株分けすることもある。暖地では秋に移植する。畦幅一・二七一・七尺、株間一・二七二尺。

移植法は労力がかかるので大面積には実行されないが、小面積ではよく行われる。わが国の暖地では路傍、畑の畦畔などに丁寧な整地をせずにアルファルファーを移植して成功している例が少くない。アルファルファーは一度移植すれば三七五年間は生存するので初年目の労力も数年間には取り返すことが出来る。

アルファルファーの刈取適期は大体花が蕾の時期から開花を始める頃である。暖地では三七四回は刈取ることが出来る。若刈はよい飼料が得られるが、若刈して刈取回数を増すと株の生存年限は短くなる。秋おそらく深刈すべきでない。

年三七四回刈で、反当生草収量一、〇〇〇七二、五〇〇貫位、乾草収量はおよそその四分の一位である。

アルファルファーは家畜に好まれ、飼料価値も高く良好な飼料である。わが国では乾草として利用することが多いが、今後は乾草或はサイレージとしての利用も工夫すべきである。天候の関係で乾草の製造が無理なときはサイレージにすることも一方方法である。

アルファルファーの乾草を粉にしたもの

はアルファルファー・ミールで、栄養価も高く養鶏飼料にも用いられる。